

近年でこそ歴史的な遺産や文化財への関心も高くなりましたが、文化財保護法が成立したのは戦後の昭和25年(1950)5月です。そのきっかけが、前年の1月26日早朝に起きた、奈良県の法隆寺金堂壁画焼失事件であったことは有名な話で、寺社拝観の人が増えたのもそれ以降です。

昭和25年7月1日(土)の金閣寺は100名近い拝観者を受け入れ、夕刻に閉門されました。そして翌2日未明、京都市上消防署室町出張所の望楼勤務員(=火の見櫓で監視する消防署員)が、西方に火災を確認したわけですが、これが世間を騒がせた「**国宝金閣炎上**」事件の始まりでした。水上勉の『**金閣炎上**』、『**五番町夕霧楼**』や三島由紀夫の『**金閣寺**』の題材にもなりましたね。

金閣は鹿苑寺(通称は金閣寺)内にある舍利殿の別称ですけれども、応仁文明の乱でも奇跡的に兵火から免れ、足利三代将軍義満が造営した北山殿の面影を伝える唯一のものだったのです。

当時の夕刊京都新聞(7月3日・月曜日)は、事件を次のように報道しています。

「二日午前三時過ぎ、金閣寺山内の国宝三層の**金閣が火焰に包まれている**のを二十丁余り東方の上消防署室町出張所の望楼勤務員が発見。全市の消防署に手配して**雨中をかけた**が、この時**寺側では初めてそれと気づき**表門を開くなどの騒ぎがあり、一番ホースが現場に到着した時には金閣は紅蓮の焰に包まれて、火は周囲の池(鏡湖池)に反映して凄絶を極め、手の施しようも無く、防火は専ら周囲への延焼防止に向けられ、金閣は床下まで完全に焼失して、同五十分鎮火した。」

これによると、夜明け前の午前3時過ぎ、雨天の中、火の見櫓の西方2km強に金閣そのものが燃えているのを発見したということですね。さらに、市中の消防車が金閣寺に駆けつけるまでは寺側では全く気付いていなかった。また、その時には既に手遅れ状態で、延焼を食い止めるのが精一杯であり、そして発見から1時間足らずのうちに金閣は燃え尽きたというわけです。

さらに続きを読みますと――

「夜中からの雨で附近は湿潤度が高く、マッチ、タバコの吸殻くらいでは大火になるものとは思えず、また閣内は電線の引込みも無く出火原因は見当たらず、現場約十メートル離れた所に紫色インク瓶、白い灰皿、鏡の破片などが遺留されていた点から、放火説が有力視されている。」

「寺に寄宿している**林養賢君(21)**―大谷大学中国語科一年―が、二日早朝来寝具機等を持出して行方不明になっており、(中略)同君の部屋には泥のついた足跡二つと靴下片方が残された点などから、放火後逃走したのではないかとの疑いが濃厚になったので、午後一時半指名手配した。」

京都地方気象台の『**気象月報原簿**』では、当時の雨量は0.4m/時間(=傘を必要としない程度)、北東の風0.7m(=無風に近い)、湿度96%です。その1週間は6月27日を除いて連日の降雨で、湿潤度は確かに高かったでしょうね。また、霧の強い日で、4km先は見えなかったようです。

なお住職の話では、取付けていた**火災報知機が前日に故障した**にもかかわらず、雨に油断して復旧を急がなかったそうです。国宝を預かる金閣寺ですら、文化財保護意識もその程度であったわけで、今だと嘘のような話ですね。住職の落ち込み様は尋常ではなかったそうです。

一方、遺留品や部屋の様子から、林は寝具・机などを運び出し、現場と部屋を往復した行動が明らかです。これだけ証拠を残せば疑われるのも当然、覚悟の上での行動だったのでしょう。

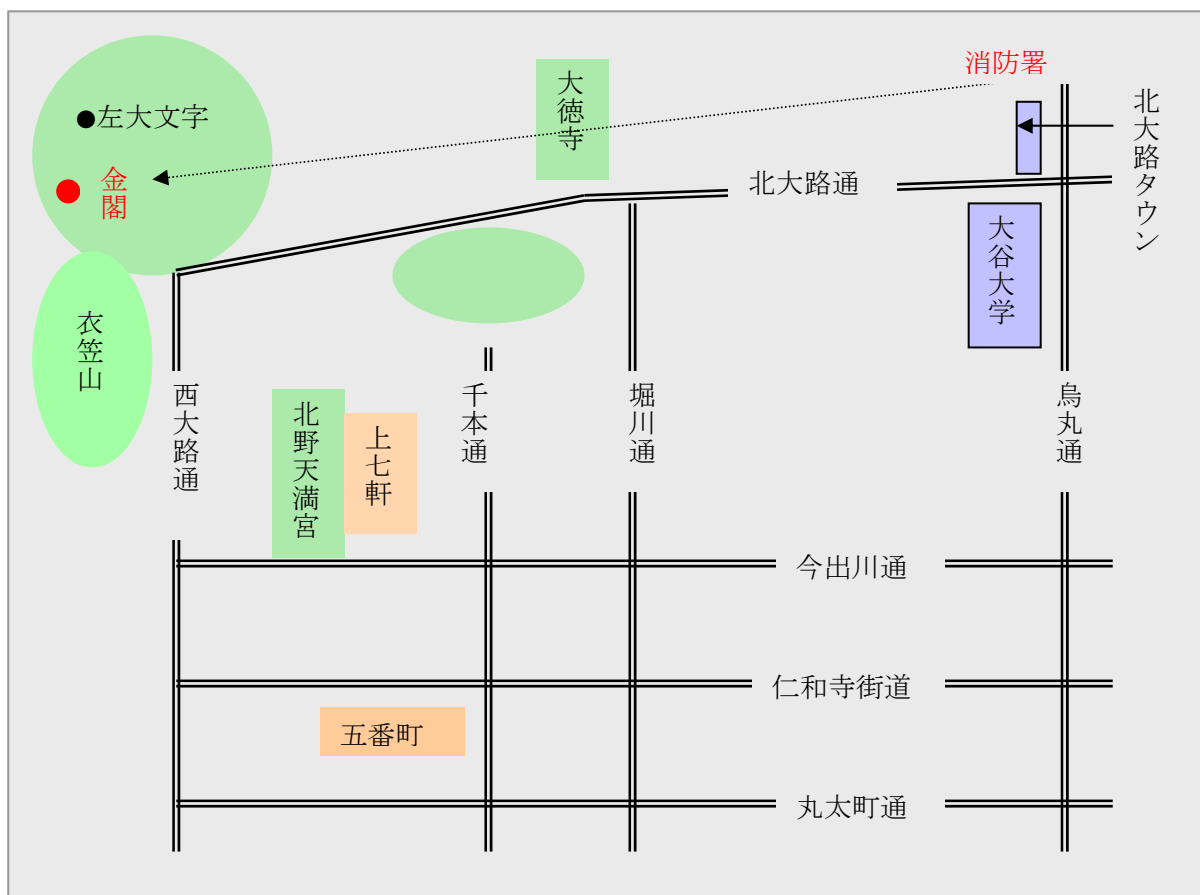
余談ながら、事件後誰にも会おうとしなかった住職に初めて会見できたのは、当時毎日新聞の京都支局員であった福田定一記者です。後年の司馬遼太郎氏、その人ですよ。

ところで、以上の報道内容について不思議に思うのは、次のような点が挙げられます。

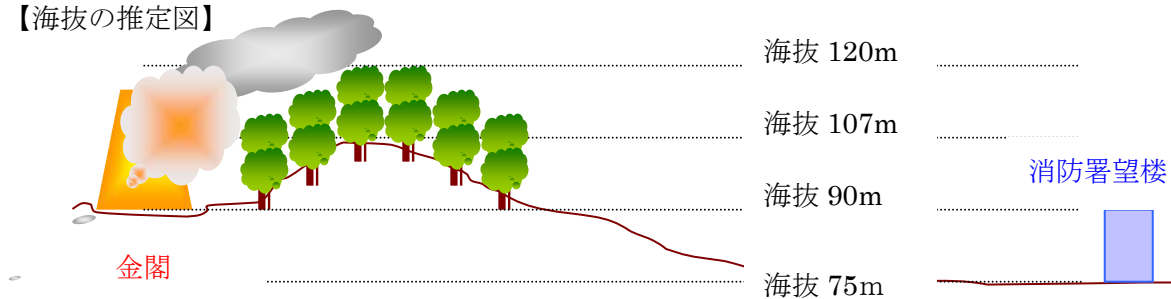
- ①夜明け前の午前3時、弱いとはいえ雨の中、明瞭に確認(判断)できたのであろうか？
- ②また、金閣そのものが燃えているのが直接に見えたのであろうか？
- ③消防署から金閣寺に対して、電話の一本もされていないのは何故か？

当時の消防署は無くなりましたが、今の北大路タウン辺りに在りました。現時点で位置関係を示しますと、消防署と金閣とは下図のようになります。消防署の位置からは、金閣は真西よりもやや南に寄っていて、ちょうど中間点の大徳寺を結んだライン上にあります。問題になるのは、金閣そのものが直接見えたかということです。当時は高いビルも無くて、見晴らしは良かったと思いますが、海拔や立地状況(=木立に囲まれた境内)から考えると難しいように思われます。

なお、プロの消防員の話では、盛んに立ち上る煙と位置関係から、金閣寺辺りで火災が発生と判断できるとのことです。金閣自体は無理でも、炎の先端などが見えたかも知れませんね。



【海拔の推定図】



次の疑問ですが、金閣の火災が分かったのであれば、なぜ寺側に電話連絡をしなかったのか？電話機の設置が少ない時代とはいえ、金閣寺にはあったはず。国宝金閣を守ることはもちろん、人命も危険に晒されているのですから、一刻も早い通報が当然ではないかと思うのです。そこで想像ですが、**金閣寺が怪しいと思いつつも、やはり特定できていなかったのではないかと……**。どうせ必要になることだから、まずは出動を急ぎ、現地を特定した上でと考えたのでしょうか？

尚、大きな消防車でしか金閣寺境内で立ち往生し、金閣の近くまで寄れなかったそうです。文化財保護法で整備したはずの防災の仕組みには、まだまだ不備な点が多かったようですね。

余談にはなりますが、太秦の広隆寺にある国宝・弥勒菩薩半跏思惟像も災難に遭いました。監視係が昼食のため席を外している間に、拝観に来た京大生が壇上に登り、菩薩像に抱き付くという行為をしたために、像の右手薬指が第二関節から折れてしまったのです。幸い、修復が比較的容易な程度で済みましたが、あまりにも杜撰な監視(警備)体制だと呆れますね。これは昭和35年(1960)8月18日のことでしたが、金閣寺炎上から10年も経ているのに、文化財保護の意識は期待通りには向上していなかったと言えましょうか。

以上、「**紅蓮の焔に包まれた金閣を発見**」との報道は正確ではないと考えます。消防署、警察、さらに取材過程で誤って伝わったのか、それともセンセーショナルな見出しを意図したためか、いずれにせよ誇張表現と言えそうです。前年の法隆寺金堂焼失の記憶が覚めやらぬ時期だけに、国民に警鐘を鳴らす意味では実に効果的ではありましたけれども。

犯人の林養賢は、その日夕刻に裏山(衣笠山)で逮捕されました。多量の睡眠薬を服用し、自殺を図った切り傷も多数あったそうです。意識朦朧の状態でしたが、犯行はその場で自供したのです。

事件を悲惨にしたのは、逮捕後に母・志満子が面会に来た時でも林がそれを拒絶したために、**母が帰りの列車から保津川へ投身自殺をした**ことです。林は金閣寺内部や仏教会の腐敗を突き、姿勢を正そうとの意図を持っていたようですが、彼の出生来の苦悩や貧しさに対する同情の声もこの件で一挙に吹き飛んでしまったかのような印象があります。

逮捕後の林は、加古川刑務所→八王子医療刑務所(極度の精神障害と肺結核のため)→京都刑務所と順次移送され、昭和30年10月30日に釈放、直ちに府立洛南病院に入院し、翌年3月7日に亡くなっています(26歳11ヵ月)。彼は、肺結核の父親譲りのためか身体は弱かったようですが、当時の様子からすると、身も心もボロボロになって孤独の内に生涯を閉じたようです。

林は事件前に何度か**五番町の遊郭**へ登楼している。当所は西陣の旦那衆が遊ぶ上七軒と違って、懐具合の乏しい者が通う場所です。泉楼の酌婦輝子(21)は、林が次のように語るのを聞いている。**「自分は近く新聞に出るような大きなことをやる」**そして実際、そのように行動したわけです。

事件から5年後、**昭和30年10月10日には再建金閣の落慶法要**が営まれましたが、さすがに本物ではなくなったとの理由で国宝指定からは外されています。この20日後に、林は釈放されているわけですが、このニュースをどのように受け止めたのでしょうか。